

モニタリングサイト1000

陸生鳥類調査 情報

2013年 2月号 Vol.4 No.2



Caprimulgus indicus
Photo by Hiroshi Uchida

結果速報

モニタリングサイト1000 2012年度繁殖期 一般サイト結果速報 森本 元(日本野鳥の会)

全国約1,000か所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは422ヶ所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査(繁殖期および越冬期)および植生概況調査(繁殖期のみを実施)を行なうことにしています。2012年度の繁殖期は、調査実施予定だった森林76サイト、草原13サイト、計89サイトで調査をお願いしました。昨年は、東日本大震災に伴い、調査者の被災状況が不明であったため当初予定した調査を取りやめたサイトがありましたが、今年度は大震災の影響を受けた県のサイトでも調査を実施することができました。ここでは、依頼した中から調査を実施できなかったサイトなどを除き、本原稿執筆時にデータが集まっている森林67サイト、草原12サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

記録された鳥類

合計138種(森林112種・草原100種)の鳥類が確認されました。これは昨年の合計153種よりも少ない値となっています。調査サイト数(現時点での集計済みサイト数78)が昨年の89サイトよりも少ない事が影響している可能性があります。森林および草原における出現率、優占度の上位種を表1,2に示しました(出現率:ある種の出現サイト数÷調査サイト数,優占度:サイトでのある種の個体数÷総個体数を平均したもの)。また、参考として昨年の森林サイトにおける値も示しました(表3)。出現率を見てもみますと、第1期(2004~2007年度)および現在の第2期(2008年度~2012年度。現

表 1. 2012年度森林サイトにおける出現率と優占度の上位種

a) 森林サイトの出現率 (n=67)		b) 森林サイトの優占度 (n=67)	
種名	出現率	種名	平均優占度
1 ウグイス	92.5	1 ヒヨドリ	13.2
2 シジュウカラ	88.1	2 ウグイス	8.5
3 ヒヨドリ	86.6	3 シジュウカラ	6.6
4 コゲラ	85.1	4 メジロ	6.4
5 ハシブトガラス	85.1	5 ハシブトガラス	4.5
6 キビタキ	74.6	6 ヤマガラ	4.1
7 ヤマガラ	73.1	7 ヒガラ	4.0
8 キジバト	70.1	8 コゲラ	3.5
9 メジロ	67.2	9 キビタキ	3.5
10 オオルリ	64.2	10 エナガ	3.0

表 2. 2012年度草原サイトにおける出現率と優占度の上位種

a) 草原サイトの出現率 (n=12)		b) 草原サイトの優占度 (n=12)		
種名	出現率	順位	種名	平均優占度
1 ウグイス	100.0	1	ウグイス	10.7
2 カッコウ	83.3	2	ノビタキ	7.7
3 カワラヒワ	83.3	3	スズメ	6.3
4 ハシブトガラス	83.3	4	カワラヒワ	4.7
5 キジバト	75.0	5	ホオアカ	4.5
6 アオジ	66.7	6	ヒバリ	3.8
7 ハシブトガラス	66.7	7	オオジシギ	3.5
8 ヒバリ	66.7	8	アオジ	3.4
9 ホオアカ	66.7	9	コヨシキリ	3.2
10 モズ	66.7	10	シマセンニュウ	2.7

表 3. 昨年(2011年度)の森林サイトにおける出現率と優占度

出現率2011年度 (n=81)		優占度2011年度 (n=81)	
種名	出現率	種名	平均優占度
1 シジュウカラ	90.1	1 ヒヨドリ	10.5
2 ウグイス	85.2	2 シジュウカラ	5.9
3 ハシブトガラス	85.2	3 ウグイス	5.7
4 ヒヨドリ	84.0	4 メジロ	5.1
5 キビタキ	82.7	5 ハシブトガラス	5.1
6 コゲラ	82.7	6 キビタキ	4.9
7 キジバト	75.3	7 ヒガラ	4.2
8 ホトトギス	67.9	8 コゲラ	4.0
9 ヤマガラ	66.7	9 ヤマガラ	3.6
10 メジロ	64.2	10 カワラヒワ	3.2

在進行中)の上位種は、年により種の多少の入れ替わりはありますが、ほぼ一致しています。これまでの上位10種はウグイス、ヒヨドリ、シジュウカラ、ハシブトガラス、コゲラ、ヤマガラ、メジロ、キジバト、ホトトギス、キビタキ、オオルリ、ホオジロでした。昨年度(2011年度)の傾向はこれと同様でしたが、第2期がはじまってからずっと1位であったウグイスが2位に後退する変化が見られました(表3)。昨年1位になったシジュウカラは、これまで長年の2~3位からついに1位になったものの、わずか1年で定位置の順位に陥落です。今後も長期モニタリングにおいてウグイス・シジュウカラの動向を注意深く見守りたいと思います。他には昨年トップ10に入らなかったオオルリが再びランクインしました。

草原サイトの結果は現時点ではあくまで参考ですが、2012年度の出現種の傾向は過去と同様の傾向でした。ただし、草原サイトは森林サイトよりも、種の入れ替わり・上位10種間の順位の入れ替わりが激しい傾向にあります。これは、もともと1年あたりの草原サイトの調査地点数が多くないことに起因するものでしょう。特に今年はサイト数が12サイトと昨年の半数ほどしかなく、この傾向が顕著であると思われる。

リュウキュウサンショウクイの動向

近年、大規模気候変動などに伴う生物の分布の変化と北上が懸念されています。そこでモニタリングサイト1000においても、亜種リュウキュウサンショウクイの分布拡大に着目してきました。本年度の調査においては、昨年同様、草原サイトでは記録されませんでした。森林サイトでは3県(熊本・大分・高知)で確認され、サイト数はそれぞれ1,4,3の計8サイトでした。これは昨年度(熊本県・福岡県で計4サイト)や一昨年(沖縄県・熊本県・鹿児島県で計6サイト)よりも微増です。また、西方への拡大の可能性が考えられることから分布が拡大している可能性があります。これについても今後の継続観察が必要でしょう。



リュウキュウサンショウクイ(撮影:橋田晃浩)

調査へのご協力ありがとうございました

2012年度繁殖期の一般サイト調査には、111名の皆様のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に代えさせていただきます(敬称略、順不同)。

阿部嗣,池野進,伊藤輝之,井上かよ子,井上史子,今川義康,岩崎健二,岩崎弘典,梅津節雄,梅津美菜,越後弘,大岩憲治,大河原彰,岡本良平,奥野俊博,柏川真隆,小坂剛,齋藤仁美,下土居知子,新谷幸嗣,鈴木創,田垣内政信,高田令子,田中葉子,谷岡仁,丹野栄一,丹野弥生,辻義次,手塚修平,手塚博之,手塚理一郎,土居克夫,徳永吉宏,長沼勲,中村圭輔,濱田哲暁,林克之,林京子,葉山政治,原田修,平野敏明,藤島牧子,藤島光俊,前田和浩,前田尚子,村田章,村田恵美子,村田一貴,森永太一,山田勝巳,山宮克彦,山本貴仁,吉田悦子,吉田捷三,吉原努,渡部康人,一戸静夫,稲田菊雄,奥田孝一,横山大八,岡垣大志,梶畑哲二,関川實,久高将和,幸德行,江口初男,佐々木 均,佐藤重穂,三浦憲悦,三原学,山形達哉,山口雅生,山田洋治郎,山本貴仁,似内功孝,篠崎知明,首藤直美,出口敏也,小園卓馬,小粥秀治,小池重人,小林繁樹,上谷川則男,森本元,秦野英徳,瀬川強,西出隆,西村公志,青山輝久,川崎康弘,船橋功,早川貞夫,村濱史郎,大平茂勝,棚邊美根子,谷岡仁,丹野弥生,竹丸勝朗,中原聡,中曾根久子,中村進,中野紀男,町田喜彦,渡辺博光,藤原正貴,梅木賢俊,満田信也,野津幸夫,有馬宏幸,林俊男,和田和夫

事務局からのお願い

メボソムシクイの記録にご注意ください

葉山政治(日本野鳥の会)

2012年9月に発表された日本鳥類目録改訂第7版では、DNA をもちいた分子系統学的研究に基づく多くの変更がありました。モニタリングサイト1000の陸生鳥類調査で影響がある変更として、3種に分けられた「メボソムシクイ」があります。3種に分かれた理由やその識別点については、本ニュースレターの4-5ページに山階鳥類研究所の斎藤武馬さんによる記事がありますので参照いただくとともに、今後の調査の際には、可能な限り識別して調査用紙にご記入いただけるようお願いいたします。以下に概要を記します。

第6版でメボソムシクイ(*Phylloscopus borealis*)は亜種メボソムシクイと亜種コメボソムシクイに分けられていましたが、これが第7版では次の3種に別れました。

・メボソムシクイ *Phylloscopus xanthodryas*

本州以南の亜高山帯で繁殖する種で、「チョチョチョリ」とさえずる。

・オオムシクイ *Phylloscopus examinandus*

カムチャッカ半島, サハリン, 北方四島で繁殖し、国内では北海道の知床半島での繁殖が確認されている。渡りの時期に本州以南でも見られる。「ジジロ, ジジロ」と三音節のリズムを持ったさえずり。

・コムシクイ *Phylloscopus borealis*

スカンジナビア半島からアラスカ西部で繁殖する。新潟や対馬で渡りの時期に見られている。濁った声で「ジィジィジィジィジィ」と同じ音要素をくり返す単純なさえずり。

オオムシクイは本州以南でも、渡りの時期にさえずりを聞くことがあると思われませんが、コムシクイは、ごく限られた記録しかありません。

混乱を招きやすいのが、これまで「ジジロ, ジジロ」と鳴くとされていた「亜種コメボソムシクイ」が種「オオムシクイ」となった点です。ご注意ください。

そこで、今後の調査の際には、種名欄には、以下のように入記ください。

- ・種が識別できた場合には、上記の種名を記入。
- ・いずれの種か識別できない場合には、「メボソムシクイsp」と記入。

結果速報

2011年度 コア・準コアサイト鳥類調査 越冬期結果報告

植田睦之(バードリサーチ)

2012年の繁殖期は、25サイトで調査を行ないました。一部調査のできていないサイトもありますが、これらで、ほとんどのコア・準コアサイトの調査が行なわれたこととなります。これまでに得られた結果をあわせて全国の鳥類の状況についてご報告いたします。

過年度の調査結果との比較

2012年度までの記録種数およびバイオマスを見ると(表1)、多少の増減はあるものの、各調査地の種数は比較的安定しているのがわかります。それに対してバイオマスは年変動が大きいことがわかります。年変動の大きいサイトの鳥の記録状況をみると、カラス類、ハト類など比較的大きい鳥が影響を与えているようです。こうした鳥は行動圏も広く、記録されたりされなかったりして、ばらつきも大きくなりやすし、体重も重く、バイオマスへの影響も大きいからです。

次に、種数とバイオマスの全国的な状況をみてみます(図1)。種数については、全体的には寒い地方が多く、暖かい地方で少ない傾向が見られました。ただし、一番寒い調査地(岐阜濁河、岩手早池峰、長野志賀)では種数が少なくなっていました。これは、一般サイトの全国的な傾向とも共通していて、寒い場所に生立する針葉樹林帯に生息する種が少ないためと思われます。バイオマスについては、一般サイトでは、暖かい地域ほど多い傾向がありましたが、コアサイトの結果では、明確な傾向は認められませんでした。上述した年変化や、市街地に近いサイトでカラス類が多いためにバイオマスが高くなるなどの要因により調査地点数の少ないコアサイトでは傾向が見えにくかったのかもしれない。

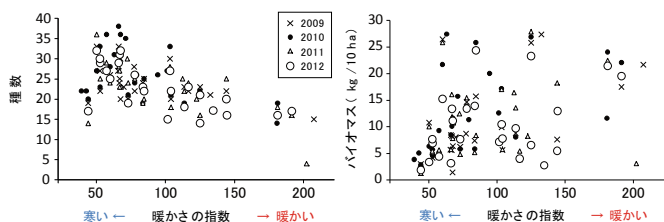


図1. 繁殖期の鳥類種数とバイオマスの暖かさの指数との関係

低木層依存鳥類が減少?

最後に主要種の個体数の増減について、毎年調査が行なわれているコアサイトを対象にみてみました。まだ4年間の調査なので、有意な増減のない種がほとんどで、繁殖期の鳥類の安定性が伺えますが、コルリとウグイスで有意な減少が認められました(図2)。近年、各地でシカが増加していて、その食圧により低木層が減少していると言われています。減少が確認された2種はこうした低木への依存度の高い種です。もしかするとそうした植生の変化が全国の鳥類相へも影響しはじめているのかもしれない。ただし同様に低木層への依存度の高いヤブサメは減少していま

表1. 2009~2012年繁殖期コア/準コアサイトの確認種数とバイオマス

サイト名	繁殖期種数				繁殖期バイオマス(kg/10ha)			
	2009	2010	2011	2012	2009	2010	2011	2012
足寄	27	33	30	30	5.31	5.74	5.45	7.67
雨龍	33	27	36	32	10.78	6.32	10.02	3.38
野幌		31			27.43			
苫小牧	26	28	24	25	26.42	21.69	25.85	15.24
大滝沢	23				8.05			
早池峰		22				5.07		
カヌマ沢	20	21	24	19	6.25	5.83	4.84	7.67
青葉山		26				20.02		
大佐渡	25	32	27	31	8.21	10.12	11.83	13.39
小佐渡	30	33	28	27	9.89	17.17	17.04	10.47
金目川		35				15.73		
那須高原	30	36	32	32	6.37	11.65	7.85	11.14
小川	22	24	25	26	14.67	13.85	15.47	13.42
高原山	27				5.69			
カヤの平	22	23	25	29	4.18	4.53	5.18	6.91
おたの申す平	19	20	14	17	3.00	2.82	1.25	1.88
筑波山	28				8.71			
大山沢	27	36	29	27	4.73	9.32	5.64	4.42
秩父	33	38	28	29	8.44	8.49	5.77	3.16
御岳濁河		22				3.84		
木曾赤沢	20				1.44			
西丹沢	24				5.60			
富士			30				12.45	
函南		27				12.62		
豊知赤津	23	19	22	18	8.82	8.07	13.59	9.72
芦生	25	25	20	22	15.72	25.83	8.38	24.37
上賀茂	23	22	16	21	25.79	26.89	27.90	23.30
春日山			25				16.44	
和歌山	24	19	19	23	7.38	5.86	5.21	13.95
大山文珠越			23				10.75	
半田山				17				11.04
臥龍山			23					16.09
宮島	21				27.36			
市ノ又	20	21	18	22	5.62	7.73	5.78	7.80
佐田山				16				12.97
対馬龍良山				14				6.58
粕屋			20					8.27
椎葉		26				11.35		
鏡	22		24	23	3.87		5.42	4.04
田野	22		25	20	7.60		18.27	5.48
屋久島照葉樹林		14				11.61		
屋久島スギ林				15				7.16
奄美		19	18	16		24.05	22.50	21.45
与那	16	17	16	17	17.48	22.07	19.75	19.55
西表	15				21.66			
小笠原石門			4					1.55

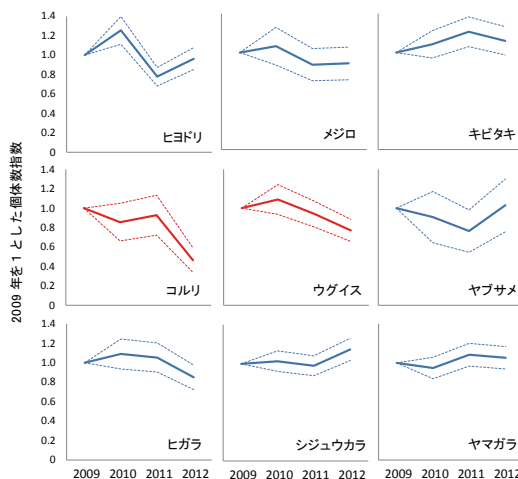


図2. コアサイトのデータに基づく各種超売りの個体数指数の変化。赤が有意な増減傾向のある種を示す。

せんで、さらに多くの種について検討し、各調査地周辺のシカの食害状況との個別の比較など詳細な解析を進める必要があります。

調査ありがとうございました

2012年の現地調査にあたっては、岩本富雄、植田睦之、大塚利昭、川崎慎二、金城孝則、河野雅志、今野怜、佐々木孝男、佐藤重穂、杉原敏、外間 聡、高美喜男、滝沢和彦、中村豊、西剛、沼野正博、原田修、平野敏明、藤江昌代、堀田昌伸、松井理生、三上かつら、柳田和美(敬称略)ほか多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

コムシクイ オオムシクイ メボソムシクイ

1. 分類と形態

分類: スズメ目 ムシクイ科

従来は3種ともメボソムシクイ *Phylloscopus borealis* とされ、ウグイス科 Sylviidae, ムシクイ属 *Phylloscopus* に分類されるのが一般的であった。しかし、最近の分子系統学的研究から、ムシクイ科 Phylloscopidae が新設され、その中に属するという、新しい分類体系が複数の世界的なチェックリストに採用されており (Parkin & Knox 2010, Terry et al. 2010), 日本鳥類目録改訂第7版でもこの体系によっている。

メボソムシクイは、これまで3~7の亜種を含む多型種とされてきた。しかし、著者らは繁殖分布域のほぼ全ての個体群を対象に、その分子系統、外部形態、音声調べ、それに基づいて従来の種 *P. borealis* を3つの独立種に分けるという分類を提唱した (Saitoh et al. 2008, 2010, Alström et al. 2011, 齋藤ら 2012)。すなわち、

- ・コムシクイ (Arctic Warbler) *P. borealis*
 - ・オオムシクイ (Kamchatka Leaf Warbler) *P. examinandus*
 - ・メボソムシクイ (Japanese Leaf Warbler) *P. xanthodryas*
- である。この分類の根拠は、これら3つの種(系統群)が、遺伝的に190~250万年前(鮮新世後期~更新世前期)と推測される古い分岐を持ち、強いまとまりを持つこと、はっきりと異なる音声形質を持つこと、一部オーバーラップはあるが、形態的にも区別できることによる (齋藤 2009)。

日本には、本州以南の亜高山帯で繁殖するメボソムシクイと、北海道・知床半島で繁殖するオオムシクイが分布する(図1)。また、コムシクイは、春秋の渡り時期に通過する(齋藤 2004)。



写真1. コムシクイ。

自然翼長: 65.9mm (63.6-68.1) n=18
 尾長: 47.3mm (41.5-52.2) n=18
 ふしよ長: 18.6mm (17.5-20.6) n=16
 P10-PC長: -1.2mm (-3.4- 0.9) n=8
 体重: 9.6g (8.5-11.5) n=17



写真2. オオムシクイ。

自然翼長: 66.3mm (60.3-71.7) n=16
 尾長: 49.1mm (46.3-52.3) n=16
 ふしよ長: 20.0mm (18.5-21.3) n=15
 P10-PC長: 0.1mm (-4.0-3.0) n=16
 体重: 11.1g (9.0-13.0) n=17



写真3. メボソムシクイ。

自然翼長: 70.8mm (68.6-75.5) n=45
 尾長: 51.3mm (45.0-54.6) n=45
 ふしよ長: 20.3mm (18.6-21.8) n=45
 P10-PC長: 2.7mm (0.4-4.9) n=37
 体重: 11.9g (9.8-13.0) n=39

※Saitoh et al. 2008を基にオス成鳥のみの計測値を示す。コムシクイの計測値は、亜種アメリカコムシクイを含む。P10-PC長は、初列風切最外羽(P10)と最長初列雨覆羽との長さの差である。

羽色: 雌雄同色。メボソムシクイは、上面、下面とも全ての種の中で一番黄色味が強く、コムシクイは上面の色の黄色味が乏しい灰緑褐色で、下面は白味が強い。オオムシクイは、その中間の色合いである。しかし、個体によっては変異があ

り、野外での羽色による識別は難しい場合がある。

鳴き声:

鳴き声は3種で明確に異なり、識別は容易である。コムシクイは濁った声で「ジジジジジジジジジ」と同じ音要素をくり返す単純なさえずりをもつ。オオムシクイは濁った声で「ジジロ、ジジロ」と三音節のリズムで鳴く。メボソムシクイは「チョチョチョリ、チョチョチョリ」と濁った声で4音節でさえずる。また、「銭取り、銭取り」とも聞きなされる。

モニタリングサイト1000の調査で記録されることの多いオオムシクイとメボソムシクイのさえずりは以下のインターネットURLから聞くことができる

オオムシクイ <http://www.bird-research.jp/1/omushikui.mp3>

メボソムシクイ <http://www.bird-research.jp/1/meboso.mp3>

2. 分布と生息環境

分布:

コムシクイは、スカンジナビア~アラスカ西部で繁殖し、オオムシクイは、カムチャツカ・サハリン・北海道知床半島、メボソムシクイは、本州以南(本州・四国・九州)で繁殖する。オオムシクイは、日本では北海道知床半島周辺でのみに繁殖しており (Saitoh et al. 2010), 同種の南限に位置する個体群として、保全学的に重要な個体群である。

また、3種は日本(八重山諸島)、台湾、フィリピン、東南アジア、インドネシアで越冬する。各種の越冬地はTicehurst (1938) に詳しい分布域があるが、DNA解析を伴った詳しい調査は未だされていない。

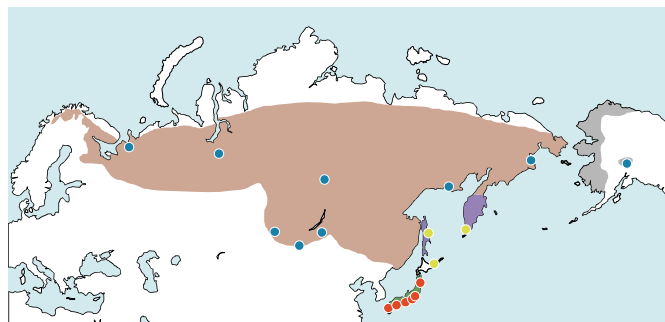


図1. 3種の繁殖分布域。丸印は、種(系統群)を調査した地点を示す。青丸:コムシクイ、黄丸:オオムシクイ、赤丸:メボソムシクイ。背景の色分けは、かつての亜種分布域を示す。Saitoh et al. 2010の図を改変。

繁殖地の環境:

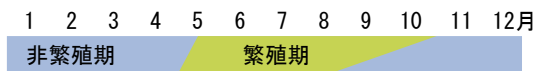
日本のメボソムシクイの繁殖地は、標高約1500~2500mの亜高山針葉樹林帯(オオシラビソ、コメツガ)や高山帯(ハイマツ、ダケカンバ、ミヤマハンノキ)である。北海道知床半島に生息する、オオムシクイも同様に、亜高山帯の森林限界付近のダケカンバ・ハイマツ帯で繁殖する。ところが、同じオオムシクイでも、サハリンやカムチャツカ半島の個体群は平地でもヤナギやカバノキ類などの落葉広葉樹が茂る河畔林で普通にみられる。ユーラシア大陸のコムシクイは、タイガ林帯の針葉樹と広葉樹が混ざった茂みに多くみられるが、同様にカバノキ・ヤナギ類が生えている、川や水辺の近くを特に好む (Cramp 1992)。

この記事はバードリサーチニュース8(11):2-3 に掲載された記事を改訂し、転載したものです

3. 生活史

繁殖システム:

一夫一妻といわれているが、コムシクイでは、ロシアのヤマル半島やフィンランドで、同時的な一夫多妻(オスが同時期に2か所のヒナのいる巣を持つ)が観察されている(Cramp 1992)。日本のメボソムシクイにおいても、一夫多妻の可能性が指摘されている(羽田・木内 1969)。



テリトリー:

オスはテリトリーを持ち、その中でさえぎり場所を防衛する。その密度は、日本のメボソムシクイの場合、1km²あたりで計算すると103.3個体である。

巣:

メボソムシクイの巣は、蘚類が茂る窪みや樹木の根の間、ササの根元、落ち枝の堆積の隙間など主に地上に造られることが多い。外巣は蘚類を主体とし、球形。入り口は側方につくり、産座にはリゾモルファ(根状菌糸束)や細根や獣毛等を用いる。

卵:

メボソムシクイの一腹卵数は、4~5卵。白色の地に微細な小斑点が散在する。コムシクイでは6~7卵。亜種アメリカコムシクイでは、平均5.9卵(5-7 n=18)(Ring *et al.* 2005)。

育雛:

メボソムシクイの抱卵・抱雛はメスのみが行い、12~13日で孵化する。給餌は雌雄で行う。巣立ち期間は孵化日から数えて13~14日である(羽田・木内 1969)。

天敵:

メボソムシクイは、ツツドリに托卵されることが多く、ある年の調査では10巣中4巣が托卵された例が報告されている(羽田・木内 1969)。巣はヘビ類にもよく捕食されるが、著者はメボソムシクイのヒナがテンに捕食されるのをビデオで撮影したことがある。

4. 食性と採食行動

ムシクイという名が示すように、主に昆虫を食する。メボソムシクイでは、夏期は昆虫を主として、甲虫目やハエ目、チョウ目、セミ目等の幼虫や成虫を食べるほか、クモ類も食べる。また、晩秋の頃には植物の実もついでむ(清棲 1952)。アラスカのコムシクイはカの幼虫や成虫を最も多く食べている(Ring *et al.* 2005)。

針葉樹林では下層部に多く、藪や低木で採餌し、ダケカンバ林では高層部も利用する。高山帯の針葉樹林内で混在する広葉樹では、樹木の下枝から下枝へ移動しながら葉や枝の下側に飛びついて周辺を飛んでいる虫や止まっている虫を食べる(中村・中村 1995)。

5. 興味深い生態や行動

メボソムシクイは、普通の夏鳥よりもさえずる時期が極端に長く、5月下旬から10月上旬にまで及ぶ。普通のスズメ目の小鳥では、繁殖後期はさえずりの頻度が極端に落ちるか、さえずらなくなるのにもかかわらず、本種のこの生態は特異である。その意義についてはまだよく分かっていない。また、オスは、翼や尾を上下させる求愛ディスプレイを行うが、メスに対して地上の蘚類や小枝を嘴でつまみ上げて放り投げることもある(Nakamura 1979)。意味は異なるが、著者はこれと同じ行動をオスのさえずりをスピーカーで再生して、捕獲作業を行っている際に見たことがある。オスが再生スピーカーに向かって、落ち葉をくわえて投げつけているのをみた時は驚きであった。

6. 引用・参考文献

Alström, P., Saitoh, T., Williams, D., Nishiumi, I., Shigeta, Y., Ueda, K., Irestedt, M., Björklund, M. & Olsson, U. 2011. The Arctic Warbler *Phylloscopus borealis* - three anciently separated cryptic species revealed. *Ibis* 153: 395-410.

Cramp, S. (ed.) 1992. *The Birds of the Western Palearctic*, Vol. 6. Oxford University Press, Oxford.

羽田健三・木内 清. 1969. メボソムシクイの生活史に関する研究. I. 繁殖生活の概要. *日本生態学会誌* 19: 116-125.

清棲幸保. 1952. *日本鳥類大図鑑 I*. 講談社, 東京.

Nakamura, T. 1979. The behavior patterns of aggressive, courtship and nest-invitations displays in *Phylloscopus* warblers. *Bull. Inst. Nature Edc. Shiga Heights* 18: 61-64.

中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)保育社, 大阪.

Parkin, D.T. & Knox, A.G. 2010. *The status of birds in Britain and Ireland*. Christopher Helm, London.

Ring, R., Sharbaugh, S. & Dewitt, N. 2005. Breeding ecology and habitat associations of the Arctic Warbler in Interior Alaska. *Alaska Bird Observatory*, Fairbanks, AK.

齋藤武馬. 2004. DNAでわかる繁殖集団の渡り-メボソムシクイ. *森の野鳥に学ぶ* 101のヒント: 162-163. 日本林業技術協会, 東京.

Saitoh, T., Shigeta, Y. & Ueda, K. 2008. Morphological differences among populations of the Arctic Warbler with some intraspecific taxonomic notes. *Ornithol Sci* 7: 135-142.

齋藤武馬. 2009. 鳥類の系統地理学への誘い~メボソムシクイを例に~. *Bird Research News* 6(11):23.

Saitoh, T., Alström, P., Nishiumi, I., Shigeta, Y., Williams, D., Olsson, U. & Ueda, K. 2010. Old divergences in a boreal bird supports long-term survival through the Ice Ages. *BMC Evolutionary Biology* 10:35 doi:10.1186/1471-2148-10-35. [http://www.biomedcentral.com/1471-2148/10/35]

齋藤武馬・西海 功・茂田良光・土田恵介. 2012. メボソムシクイ *Phylloscopus borealis* (Blasius) の分類の再検討 -3つの独立種を含むメボソムシクイ上種について-. *日本鳥学会誌* 61: 46-59.

Terry, C.R., Banks, R.C., Barker, F.K., Cicero, C., Dunn, J.L., Kratter, A.W., Lovette, I.J., Rasmussen, P.C., Remsen, J.V., Rising, J.D., Stotz, D.F., Winker, K. 2010. Fifty-first supplement to the American Ornithologists' Union Check-List of North American Birds. *Auk* 127(3): 726-744.

Ticehurst, C.B. 1938. A systematic review of the genus *Phylloscopus*. *British Museum (Natural History)*, London.

執筆者

齋藤武馬 公益財団法人 山階鳥類研究所

大学院からメボソムシクイの研究を始めて、もう10年以上になります。メボソムシクイのおかげで、ロシアやモンゴル、日本各地の様々な地域に野外調査に行くことができ、沢山の知り合いもできました。これからも地域や人の繋がりを大切にしながら、ムシクイ類やその他の分類群についての系統地理学的研究を行っていきたくと思っています。

事務局からのお知らせ

冬鳥の飛来状況のアンケートにご協力ください

植田陸之(バードリサーチ)

今年は夏の終わりから、ヤマガラが普段は見られることのない市街地の緑地で観察されたとの報告が寄せられました。そして、秋になると、同様にヒガラの情報が届くとともに、ウソが多いという話がそここから聞かれるようになりました。

昨冬を振り返ってみると、ツグミが見られないことが話題になっていました。しかし全国の情報をあつめてみると、北日本や山間部では例年と変わらないか多いところすらあり、山の木の実が豊作だったことから、鳥の動きが異なっていて、低地ではツグミが少ないように感じたのではないかと思われました。では、今年の冬鳥の多さはどうなのでしょう？全国的なものなのでしょうか？それとも昨年と逆に、山には鳥が少なく低地で鳥が多いのでしょうか？すでに戻ってきた今冬のコアサイトの高標高の調査地ではヒガ

ラの少なさが示唆されています。

そこで以下の鳥たちを対象にアンケートを実施することにしました。情報提供よろしく願いいたします。

対象種：ツグミ、シロハラ、ヤマガラ、ヒガラ、キクイタダキ、ウソ

内容：観察地点とそれぞれの種が、少なかったか、例年どおりだったか、多かったか、普段はいないところで越冬したのかなど選択するだけの簡単なものです。



アカウソ(撮影：内田博)

以下のHPより情報を送信下さい

<http://www.bird-research.jp/1/fuyudoriq.html>

これまでの結果はこちらから見ることができます

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/fuyudori/q2012.html

文献情報

モニタリングサイト1000のコアサイトでの調査結果や、関連して行なわれている調査の成果が論文として公表されたので、内容をご紹介します。

植田陸之. 2012. 沢音は鳥の局所的な分布に影響を与えている？～埼玉県奥秩父での一事例～.
Bird Research 8: S19-S24.

コアサイトの大山沢は沢が地表を流れたり、地下にもぐったりしています。ここで繁殖期に調査をしていると沢が地表を流れ、沢音のする場所では鳥が少ないように感じました。そこで、定点を増設して沢音の有無が鳥に影響するかどうかを調べてみました。その結果、沢音とさえずりが重なってしまい、沢音が影響しやすい周波数帯の声でさえずるヒガラやゴジュウカラは繁殖期には沢音のする場所を避けているけれども、越冬期は避けていないことがわかりました。また、沢音の影響を受けにくい高周波数帯でさえずるエゾムシクイは逆に沢音のする場所で多いことがわかりました。1地点の結果なので、さらなる情報収集が必要ですが、沢音はさえずり伝播の障害を通して鳥の局所的な分布にも影響を与えていそうということがわかりました。

植田陸之・平野敏明・黒沢令子. 2012.
長時間の録音データから鳥のさえずり状況を知るための聞き取り時間帯の検討.
Bird Research 8: T1-T6.

コアサイトでは、鳥の繁殖時期の長期的な変化をモニタリングしようと、タイマー付きのICレコーダを設置して、毎朝のさえずり状況を記録しています。しかし、多地点/長期のデータがたまってくると、その聞き取りをするのは大変です。そこで、短時間の聞き取りでその日の様子を把握するにはどうしたら良いのか、ということを検討してみました。

聞き取り結果から、予想通り日の出の頃が、一番多くの鳥を記録できることがわかりました。しかし、鳥にも朝寝坊の奴はいるもので、その時刻だけだと記録できない種が出てきてしまいました。意外だったのは、通常早起きの種も渡来当初は鳴きはじめる時刻が遅いことです。渡来当初はみなさんお疲れで早起きできないのでしょうか？これらの結果をあわせて考えると、日の出前後の10分と、日の出から1時間後の10分の両方を聞き取れば、その日のさえずりの状況が大まかに把握できることがわかりました。